第38号（1月～4月／2001年）

―農場便り―

タイ・パヤオ２１世紀農場
谷口巳三郎

◇農場概要

Ａ）２１世紀農場の経営面積及びスタッフ、研修生

１．面積：２５㌶　　自作地：２０㌶　　小作地：５㌶（水田）

２．スタッフ：５名

・谷口　巳三郎　　場長
・ビン・ブロムソン　（２９）教務主任　イネ作　（５年前日本へ研修１０ヶ月）
・スッチャイ　（３０）寮長　果樹　（２００１年メ・ジョー大卒業）
・ニット・ブロムセン（２８）野菜　（昨年日本へ研修１０ヶ月）
・ジョー　（２３）養豚　養鶏　（定時制大学で学習中）

３．助手資格

・スントーン（３０）　研修生　野菜部門　（定時制高校で学習中）
・フー　（２０）　〃　堆肥製造部門　（　〃　）
・ルー　（１８）　〃　２００１年入場（　〃　）
・その他に賄い婦２名

４．生徒（パヤオ農校１年次生）　２０名　３月２９日終了

Ｂ）運営資金の調達

我々の２１世紀農場の運営資金は日本の二つの支援団体の支援金と、今年は下記の日本政府の制度資金を拝受できる。タイ国の政府、民間からの支援金は全くない。

○日本政府関係の資金援助

Ⅰ　郵政省国際ボランティア貯金
　２０００年度分４２１万円（２００１年6月３０日迄の分）

Ⅱ　日本大使館の草の根資金
　２００１年2月７４０万円（２００２年3月３１日迄の分）

我々の農場の年間の執行予算の合計は2000万円を超すことになるが、そのうち約45％にあたる800万円と150万円は「タイとの交流の会」の支援金である。800万円は日本の里親によるタイの里子への奨学金で、このおかげで売春婦とエイズが急激に減り始めている。また、150万円は高地民族が山で自立するための植林事業「果樹の森」の資金で、地球環境を守る上からも役立っている。

Ｃ）農場のプロジェクトの内容

我々の農場は所謂ＮＧＯ、即ちＮＯＮ　ＧＯＶＥＲＮＭＥＮＴＡＬ　ＯＲＧＡＮＩＺＡＴＩＯＮ（非政府組織）といわれるものである。６年前にタイ政府より認可された農村開発を目的とした組織で、ＮＧＯとは認可されても差し当たりメリットはない。その目的が遂行出来なくなれば（例えば運営資金などの調達が出来なくなったりした場合）タイ政府に没収されるのである。

○教育事業

我々の農村開発のシステムは次の３つのカテゴリーに分かれる

ｉ　タイ農村青年教育

ⅱ　タイ農民及びメコン河エリヤ諸国の農民の啓蒙
ⅲ　日本人の研修受け入れ

上記の３項目に関する今期（１月～４月）の活動内容は次の如くであるが、先ず研修に参加した人数の統計を示すと下記の通りである。

ａ．総研修者数（１月～４月、120 日間）

月	タイ人	日本人	宿泊研修者（のべ人数）
1	２２３	１０	５８
2	１２０	２０	４８
3	１６５	２７	２５６
4	１６７	7	１６６６
合　計	６７５	６４	２０２８
１日平均	5.6	０.５	１７

※宿泊研修者は左欄の中で宿泊して受講した人数を含む

ｂ．日本、ラオス、ビルマよりの研修生受入数（１月～４月）

期　間	日　本　人	ビルマ・ラオス	総のべ人数
１月～４月	長期研修生		１６０
1/30 ～ 2/1		ラオス農高教員	２２
1/31 ～ 2/3	熊本ｱｼﾞｱﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟ予備調査		8
2/5 ～ 6	JIKA		2
2/10 ～ 11		ビルマ高地民	３４
2/12	支援会会員		8
2/23	ロータリークラブ（熊本）		１２
3/1 ～ 4	熊本ｱｼﾞｱﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟ		７２
3/25 ～ 29	松戸市立高校		４５
4/22 ～ 23	山岸会		8
合　　計			３７１

Ｄ）農場の農業経営の現状

地理学上のサバンナ地帯に位置する我々の農場は、日本の農業を経験した私にとっては「農民にとっては恐ろしい所である」と言いたい位に作物栽培、家畜飼育が難しい。要するに雨量が少なく高温なのである。例えば我々の農場は北緯 19°30、東経 100°05 に位置するが、雨量は年 1200 ㎜、平均気温は 26 ℃である。（九州は 1600 ㎜に 16 ℃）従って、生物は多様性を極め病虫害も甚だ多い。そして販売にのりやすい作物や家畜は、大方は北の先進国で開発されたものが多いので、化学物質を使わなければ採算ラインにのせることは至難の業である。

熱帯という所は、人間には高温すぎるし農業には水が足りないのである。以上の地理上のハンディの下、我々は有機農業形態で苦闘している。

１．作物

ⅰコメ　水を供給すれば周年栽培が可能で、日本米はこの乾季が合っている。しかしこの季には周囲が水不足の為、作付けしないので我々のみが日本米を作ると自然界の野鳥やネズミに全滅させられるので、少ない面積であるがバンコクの日本の食品会社等の要求で日本の粳、糯を 30㌃位作った。収量は雨期作より多いがコストは高い。

ⅱ野菜　自給用は別として、販売目的として里芋を約１㌶作ったが、全く給水の闘いであった。今季は５ヶ月間雨は全く降らなかったと云ってよい。従って収量も半作に近く、昨年のイネの跡に植え付けたものが今日出荷の最盛期である。５～６ヶ月かかっている。

２．畜産

母豚 20 頭は順調に産子しており、ブロイラー、産卵鶏は周年十分に自給して食卓を豊にしている。農場の給食人口は年間を通じて１日当たり 100 食であり大きい圧力である。

Ｅ）農業教育

何故若者が我々の農場に集まるのか。昨年の 2000 年から 2001 年にかけて外部より多くの人々が農場にやって来た。上記Ｃのａの統計は 2001 年の１月から４月の４ヶ月分である。この数字には我々の農場生は含まれていない。宿泊研修者数はこの 120 日間の間 2028 人であるから１日平均 17 人となり、この数は我々の農場生の数に近い。

その教育機関に外部より研修にやってくる人々、それも向こうのプランでやってくるので年次プランなど立てることは出来ない。そのような人数が元来のその教育機関（学校）の生徒ということは、何たる現象かといいたい。とにかく異常な数字であり、財政上も問題が大である。

１．タイ農業履修の学生の教育

パヤオ農業高校との連携による１年次の生徒２０名は、３月２９日に卒業。この他にタイ国内の４～５校の大学及びカレッジの学生の長（２ヶ月）、短（半月）期の延べ 150 名の研修受け入れ、及び郡内の中、高校の研修、見学は延べ 500 名位に達した。

２．農民の啓蒙

農場近隣のタイ農民が組織的に、特に循環型農業、有機農法、堆肥作りに関心を持って研修に来場、今年は昨年暮れに引き続きラオス・ビルマからも宿泊研修あり、期間内の合計約 300 名。

３．日本人の見学、研修の受け入れ

ⅰ　長期生　４名（最長１年、２～３ヶ月、１週間）

ⅱ　熊本・アジアパートナーシップのメンバー１８名が昨年に引き続き第２回目、４日間の滞在中、県知事、郡長の表敬訪問、エイズセンター、高地民族の焼き畑の実体見学、民泊も実施。

ⅲ　千葉県松戸市立高校生その父兄計９名、この学校からは第２回目であり、この高校との関わり合いは前の第３７号の農場便りに詳しく述べた通りである。

◇エイズシリーズ第２４話

エイズ、その死にゆく人々の為に　われその杖とならん　そのあかりとならん

エイズ患者と関わり始めて６年が経った。それまでに「熱帯に生きる」というエッセーを既に４年程書き続けてきていたが、1995 年にそのエッセーの中にエイズ問題を書くことになった。それが６年を経た。

ここでエイズ関係のエッセーだけを抜き出して、エッセーを書いた年代の順に第１話、第２話と NO. をつけてみると、2001 年に入り 23 話となった。そしてエイズだけのエッセーを集めた小冊子を作った。その小冊子の表紙に「私のエイズ最前線」と銘して、私の支援者や私の理解者の人々約 100 名に配布した。

このエイズシリーズの第 19 話の「ある木曜日の朝」にある如く、毎週の木曜日のエイズ患者の週１回の集合日に合わせて、我々が農場でとれた野菜、果物、卵等を持参してそこに集まる患者達に分け与えている。それは以前にも不定期に実行していたが、2000 年（平成 12 年）７月 20 日以降は今日まで絶やすことなく農場の産物を彼らに配布し、又その日は集団給食も病院側が行っているので、その料理の材料も我々の持参するものが使われている。かくの如く、我々がこの行動を始めてから 10 ヶ月が経ち計 42 回（2001 年５月 10 日現在）運び配布したことになる。１回に運ぶ量や持参する種類は、その時その季節によって同じではない（詳細はエイズシリーズ第 21 話）。これらをピックアップトラック１台と赤い軽ジープで運ぶのであるが、軽ジープは必ず私が往復５０㎞を運転する。

野菜等をこういうふうに毎週欠かさず持ち込んで配布すると、患者側がこの木曜日を「楽しみの日」として心待ちにするようになった。多少身体の具合が悪くても、集合場所に来てジーッと座っていることが出来ず、枕を当てて横になりたい程に不按配の者でも出席することになる。

その様にして、私は７日毎に必ず彼らと連続して接触し、彼ら１人１人の健康状態、顔色を

確かめうるチャンスを持つことになる。時折新しい顔の参入があるが、そしてそれとは反対にその１週間の内に死んで、私の視野に永久に現れることのない人々もいる。それは正に平家物語の「沙羅双樹の花の色、盛者筆衰の理をあらわす」を自分の掌の中で確かめ見る如き無常観に襲われる。

「エイズグループは死にゆく人々の群である」と私は言いたい。老子の「天網恢恢疎（てんもうかいかいそ）にして漏らさず」の通りである。毎週会っていると１人１人が死への道を辿っている姿がよくわかる。それはエイズ患者はある時（重症になってから）川岸からズルズルと川に滑り落ち、流れに押し流されて行きながら岸につかまるのを求めてもがくが、手を差し伸べてもつかまるものは無い川、それがエイズの川であり、エイズ患者すべてこの死の川に押し流されて溺れ死んでいくのである。そして私は今、その川を少し高い所にある土手の上から、どうにも救いようのない川の流れに押し流されて行く人々を見ているのだなあと思うことがある。

エイズグループは、死にゆく人々の群である。それが木曜日は狭い空間にギッシリと詰まって集団で行動をとっている。これが私に苦痛の圧を感じさせるのである。

援助の始めの頃は、今日もエイズセンターへ行って野菜や卵を配り、皆が喜び、感謝する姿を見、そして笑顔を作って拙いタイ語ではあるが“ワディーカップ（おはようございます）お元気でしょうね”と挨拶し、目も落ち窪んで笑顔も作れない数人の患者の所へ行って手を取り肩を軽く叩いて“もっと沢山食べなきゃ”と・・・・・

私の一同への挨拶に対し、健康状態が幾段階に分かれた患者たちが感謝の眼差しで一斉に合掌で挨拶を返す。しかし、最近になってこの様な毎木曜日の朝の挨拶の交流の時にある種の彼らの群の圧力が、私を包むことを感じるようになってきた。それは彼らの間に醸しだされる雰囲気ではなく、私自身が己に対して作る精神状態と云うべきかもしれない。いわば「10 ヶ月も経って、本当に彼らの力になれる様なことが出来たのか、一体私に何がしてやれるのか」という無力感から来るものであろうか。

確かに人間万人、生存出来る時間というものは地球の悠久の長さに比べたらアッという間だけの「一瞬の間」としか云い様のない長さであろう。しかし一般人には、己の死にタイムリミットの恐怖はないであろう。それに比べると、確かに彼らエイズ患者はその死の時は不確かではあるが、はっきりと「旦夕に迫っている」と宣言されている訳である。そしてその印が顔色、皮膚の色、空ろな目に表れている。

これは私のエイズ患者援助に就いての最初の心の変化の一端である。しかしだからといって私が彼らへの様々な援助の手を緩めるという訳ではない。

今まで「私のエイズ最前線」としていたものにサブタイトルをつけた表紙「エイズ、その死にゆく人々の為に　われその杖とならん　そのあかりとならん」を表装して下さらんことをお願い致したいのです。たとえ、私のか細い力でもエイズの彼等が杖として望むならその杖となろう。又、たとえ私に彼等にとって微かな蛍ほどの光でもあればそのあかりになろうと思う。と再決心し、努力をしていきたいと思うこの頃です。

それも皆様のお力添えがあってこそ叶えられるものです。私と一緒にお歩み下されば幸甚の至りです。

「あかり」が見出せたらおのずと微笑みも湧かん

天は疎なれどこの人々を洩らさず

発　行：平成 13 年９月
発行者：タイとの交流の会
（谷口プロジェクト）
代表／谷口恭子
住　所：菊池郡泗水町富の原 205-18
ＴＥＬ：０９６８－３８－３０３５